

昭和一〇年（一九三五）が初版の旅行ガイド『近畿日への行楽』（松川二郎著）によれば、東播海浜の売りは、尾上・高砂・曾根の三松を周る「松めぐり」で、三松はそろって天然記念物でした。特に曾根天満宮境内の松は、菅原道真の手植えから二代目、枝張り面積は三百坪に及ぶ巨木と記されています。シーボルトも愛でた老木です。

戦時の造兵廠進出で、「工場の村」となった荒井の海浜は早く埋立地と化し、また戦後の食糧難時代に高砂浦の総耕地化をめざして当時の高砂町に干拓委員会が設立される（『神戸新聞』昭和二三年九月九日）動きもありますが、「白砂青松」は、確かに戦後も高砂のシンボルでした。その昭和二三年、「県下の穀倉」Ⅱ加印では、田植時期から干害が憂慮されるなか、新法に基づく農業協同組合が発足しました。農協は、農地改革の生み出した自作農経営を

守る組織として占領行政が期待を寄せたものです。

霊松「曾根の松」の異変は、人々が「郷土」再建に踏み出そうとした矢先のことです。曾根町役場・町民、伊保・阿弥陀にも広がる天満宮氏子連など、地域総出の手当が施されました（同社報『神麓』第二〇号、参照）。干害・虫害・老衰が重なり、松の枯死は昭和二四年中に確認されますが、その霊姿は惜しまれ、根幹を残して伐採されたのが二八年です（『神戸新聞』同年五月二〇日）。

昭和二七年には、曾根町が天満宮東側の松林に「松原公園」を整備することを決め、町民は公園道路建設作業への各戸一人の動員に応じました。驚くべき事実です。今六代目（天満宮によれば五代目）となる「曾根の松」とならんで、松原公園は健在です。

（高砂市史編さん専門委員
 大森 実）